柳田学の「いま」

生誕百年記念事業に寄せて

（稲葉　暁記者）

今年は、日本民俗学の建設者、柳田国男の生誕百年。日本近代の総体に大きな影響をつきつけて去った柳田国男の世界に、いま、多くの人々の関心が寄せられている。その思想と学問をめぐって数多くの柳田論が書かれたが、柳田はいぜんとして「その人であること」をやめない。今夏、東京で開かれる国際シンポジウムでは、広く隣接諸科学の研究者や、海外の文化人類学者らの参加をえて、その学の今日における意味が検討されるだろう。

ことし三月、サンフランシスコで開かれたアメリカ・アジア学会の年次大会に「柳田国男研究」のパネル・ディスカッションが設けられた。報告者は、柳田の著述『先祖の話』などの英訳者、ファニー・ハギン・メイヤー夫人、プリンストン大学のマリウス・ジャンセン教授について日本史を修めたロナルド・モース氏、それに日本から参加した社会学者の鶴見和子氏の三人。メイヤー夫人が日本の口承文芸研究について紹介し、モース氏が現在の日本における〝柳田ブーム〟を分析、鶴見氏は「土着的発展のモデルとしての柳田国男の仕事」と題して、近代化にかんする西欧理論と対比しながら柳田の仕事の発展可能性を説いた。

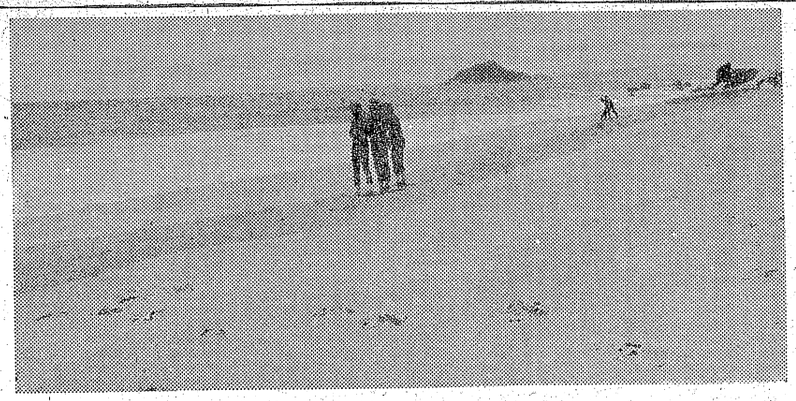
国際的にも注目

鶴見氏によると、このパネルには主催者たちの予想を上回る参加があり、また、聴衆のなかから「柳田民俗学は民衆にとってアヘンなのか」「柳田の仕事には社会変革につながるものが欠けていたのではないか」といった鋭い見解も提出された、という。

報告者の一人、R・モース氏は柳田国男の研究で学位をうけ、わが国の研究者たちにも広く知られている人。柳田の業績についての海外での関心は、戦前、ウィーン学派の民族学に一時期を画したといわれるウィルヘルム・シュミットによる紹介や、柳田から親しく指導をうけたロシア人、ニコライ・ネフスキーらを通して、ある程度はひろまっていたといわれる。鶴見、周作人の兄弟が、日本民俗学の草創期から、柳田に深く注目していたことも有名だ。

しかし、それは、たとえばレヴィ＝ストロースやマリノウスキーの国際的な名声とは比較にならないだろう。著名な日本研究者ですら、「柳田というのは右翼ではないのか」という程度の認識でしかない（色川大吉氏）。鶴見氏も、柳田にたいする海外の関心の最大公約数は、現状では「日本研究のためのデータの宝庫」といったところだろう、という。

が、ともあれ、外国人とともに柳田国男を論じあう機会が生まれ



青年柳田国男は伊良湖岬に遊んで、後年、『海上の道』として結実する壮大な夢を描いた　＝愛知県・伊良湖岬で

〝野の学問〟への傾斜

急成長ざ折、引き金に

近代化へ根底的な疑問

文化

トによる紹介や、柳田から親しく指導をうけたロシア人、ニコライ・ネフスキーらを通して、ある程度はひろまっていたといわれる。鶴見、周作人の兄弟が、日本民俗学の草創期から、柳田に深く注目していたことも有名だ。

しかし、それは、たとえばレヴィ＝ストロースやマリノウスキーの国際的な名声とは比較にならないだろう。著名な日本研究者ですら、「柳田というのは右翼ではないのか」という程度の認識でしかない（色川大吉氏）。鶴見氏も、柳田にたいする海外の関心の最大公約数は、現状では「日本研究のためのデータの宝庫」といったところだろう、という。

が、ともあれ、外国人とともに柳田国男を論じあう機会が生まれたのは新しい潮流に違いない。ことし上月、柳田国男生誕百年記念会が主催する国際シンポジウムも、柳田を世界の舞台の上で見直そうとする一つの試みだ。

わが国においても、柳田国男は長く「隠微学」とみなされ、その仕事は一閑人の余技」としてしば遇されなかった。昭和十年は柳田の還暦を祝って日本民俗学講習会が開かれ、この学問が確立された画期的な年とされているが、この年に増補再刊された『遠野物語』は一般からはほとんど黙殺された。それへの「公憤」にかられて桑原武夫氏が「書いたといわれる「遠野物語から」（昭和十二年）が、柳田の学問の「人文・社会科学」における、いわば市民権の承認を掲げた先駆的な文章」とされているのである。

昭和三十七年一月の『定本柳田国男集』全三十六巻の刊行開始、同年八月の柳田の死をきっかけに〝柳田国男論の季節〟がはじまる。研究書、論文集、雑誌の特集号などが相次いだ。「歴史的人物」として縦横に論評、裁断される柳田の姿は、「これもカリスマの悲劇」と故堀一郎氏を嘆ぜしめたほどである。四十八年には谷川健一、伊藤幹治、後藤総一郎、宮田登四氏の編集によって、柳田の学問と思想のトータルで内在的な検証を目的に、季刊誌『柳田国男研究』が創刊され、現在までに八号を数えた。一人の学者・思想家を研究対象にした雑誌には珍しい多数の読者を持っている。

柳田国男の学問は「とるにたりない日常茶飯事」を出発点にすえた、いわば草の根の学問だ。そして大勢の草の根の人たちがこれに参加し、これをささえてきた」（岡正雄氏）。他に類を見ない、こうした性格が、この学問がいま広く人々の関心を集めている一つの理由だろう、と岡氏はいう。

環境破壊に直面

しかし、それだけではないだろう。柳田国男に向けられた人々の熱い視線のかげには、高度成長政策の破たん、公害・環境破壊の激化などといった、ここ十年間の社会の大きな変化が伏在する。それはさらに、「ヨーロッパ近代の諸原理にたいする反省、近代合理主義にたいする根底的な疑問」を誘発しないではいなかった。〝黄金の六〇年代〟に育ち、学園紛争を体験し、すさまじい環境破壊の進行に直面するなかで、柳田の〝土着の思想〟〝野の学問〟への傾斜をつよめたという若い研究者も何人かいる。

「現実を、輸入学問のワクにあてはめて、PBがいくらと言ってみたってどうにもならない」――公害告発の運動をつづける宇井純氏は、貧乏をなくす学問を標榜（ひょうぼう）した柳田の問題意識と、全国をめぐり各地の農民との対話のなかできたえられた自然観察の鋭さに学びたいと話す。

柳田がみずからの学問の主たる対象としたのは農民であり農村であった。工業労働者が圧倒的多数を占め、農村の都市化が著しい今日、彼の学問はもはや有効性を持ちえないのではないだろうか。一国民俗学をとなえ、日本と日本人とを問いつづけた柳田学は、はたして国際的な普遍性を持っているのだろうか。

西欧の近代化理論との比較をとおして、柳田学の理論的骨組みを取り出す作業をつづけている鶴見氏は、「柳田学のもっとも大切な今日的意味」は、それが「わたしたち自身のうちに、原始・未開人を発掘した。そして、われらのうちなる原始・未開人を『ゴゴ』させて、近代人をのりこえる手がかりを示した」ことだとする（「われらのうちなる原始人」）。

日本人と日本社会の内部には、原始・古代・中世・近代が「入れこ細工」のように存在している。そして柳田は、近代が必ずしも価値高いわけでもなく、原始・古代が低いのでもない、と主張する。前近代は近代にたいしてマイナスの価値しか持たず、前近代的なものをなくして行くことが真の近代化だとする西欧の段階発展論とは、ここで分かれる。

「新興国へ輸出を」

柳田国男によって、わが国の伝承文化の世界は、文学の世界に組みこまれ、地方文化が国民文化として再編成されることができた。たとえば、彼の『遠野物語』によって、遠野郷は日本人全部にとっての「ふるさと」となった。柳田は「ただ過去への哀惜や、滅びゆくものへのあわれみのためにだけ働いたのではなく、この明治以来の国民形成に参加したのだ」と采山俊一氏（文化人類学）はいう（神島二郎ほか編『シンポジウム柳田国男』）。そして氏は柳田学の〝輸出〟の必要性をとなえる。

いま、世界の多くの新興独立国で、近代化を急ぐあまりに、適切な処置のとられないまま、広大な無文字文化が急速に失われつつある。そうなれば植民地時代以前の、何千年にもおよぶ彼らの歴史は完全な無に帰してしまうほかない。米山氏はいう。「柳田学を、ただ日本研究の枠（わく）にとじこめておくことは正しくない。多くの国々が、それぞれの国学――内省の学としての柳田学を必要としている」と（同書）。

朝日 昭和50年(1975) 6月10日(夕)

柳田学の「いま」

→2←

生誕百年記念事業に寄せて

孤独な漂泊者

鈴ケ森神社の付属地に移築復元された柳田国男の生家＝兵庫県神崎郡福崎町で

郷土体験が思想形成の芽に

農政研究へ駆り立てた貧困

建設進む顕彰会記念館

四畳半と三畳がそれぞれ二間、それに縁側とタタキの土間だけのこちんまりした家。カヤぶきの屋根が周囲の雑木林とつり合ってすがすがしい。兵庫県神崎郡福崎町西田原、鈴ケ森神社の土地に、昨年三月、移築復元された柳田国男の生家である。内部は畳と障子がはいっているだけで、まだ一般には公開されていない。

そのすぐ隣で、「財団法人柳田国男・松岡家顕彰会記念館」の建設がすすんでいる。鉄筋コンクリート二階建て、のべ面積五百平方メートル余、総工費約七千七百万円。こと七月末の柳田国男の誕生日までに一部を開館、八月いっぱいで完工の予定という。神社の小高い丘の上にあって、田んぼをへだてて二百メートルほどの距離に、柳田の生家跡のある辻川の集落が見わたせる。少年松岡国男の遊び場の一つだった業師堂や、彼の猛烈な読書欲を思う存分にみたしてくれた豪農三木家の土蔵ふうの建物も見える。落ち着いた田園の風景である。「うぶすなの森のやまもも高麗（こま）犬は懐しきかなものいはねども」と彼がなつかしんだ神社の境内も、おそらく松岡少年の書とそう変わってはいまい。

「顕彰会」の設立は昭和四十七年。事業計画には、生家の移築復元、記念館建設のほかに、柳田国男と松岡家一門に関する資料の収集・展示・保存、研究会や講演会の開催、奨学金制度の創設などがうたわれている。松岡家一門とあるのは、主に、柳田の次兄で御歌所寄人から松江税務官になり万葉学者としても知られた井上通泰、民族誌学者・言語学者で『日本古語大辞典』などをあらわした次弟松岡静雄、日本画家で東京美術学校教授、帝国芸術院会員だった末弟松岡映丘の三人のことである。

生家の移築費用には、県や町からの補助のほかに、町内の各家庭から寄付をつのった。少ないところは三百円ぐらいから大口では万単位の額まで、四千余世帯の全部が応じたという。「おかげで、あお柳田はんのことかいな、と大いに町民の関心が高まりました」そうだ。

医者兼漢学者の六男に

ちょうど百年前、柳田国男はこの土地の貧しい医者兼漢学者、松岡操の六男として生まれた。この父からは「読書の性癖と神秘的な他界感覚の素質」を受けついだ。

母の生地に移住していた明治十八年は、きょうの惨状を経験し、それが彼を農政研究へかりたてた動機となったと、柳田はみずから語っているが、その背景には、こうした彼じしんの貧困の体験もあったに違いない。子ども心に何とってもらったりしなければならなかった（中井信彦『歴史学的方法の基準』）。さらに明治二十年、十二歳のときには、長兄が医者を開業していた茨城県北相馬郡の布川（現在の利根町）へ引きとられて行く。柳田の少年・青年期にたたよっているのは「みなくてい孤独な漂泊者のエトランゼ」（橋川文三氏）である。

母の生地に移住していた明治十八年は、きょうの惨状を経験し、それが彼を農政研究へかりたてた動機となったと、柳田はみずから語っているが、その背景には、こうした彼じしんの貧困の体験もあったに違いない。子ども心に何と行った。故郷の地名・地形への興味が習制の研究へ、父に教えられたズズ玉の記憶が『海上の道』に結実する日本民族の起源論へ、稲荷祠の記憶が稲作儀礼の研究へ、結婚式に男蝶女蝶をつとめた体験が婚姻史研究へ、さらに、これは布川移住後の経験になるのだが、利根川の白帆の印象が風の研究へ、といったように「後年の大きな研究の萌芽が、そのまま幼少年期のナイーヴな体験のさまざまな様相の中に埋もれていた」のであった（橋川文三『柳田国男――その人間と思想』）。

帰る故郷を持たぬ境涯

明治二十年代末、新体詩人として出発し、国木田独歩、田山花袋、宮崎湖処子らとともに日本近代詩の確立に一役買った柳田は、間もなく、文学を捨てて、新しい農政学への道をまっしぐらに突きすすむ。時代は日清・日露の二つの戦争の中間期、日本全体が一つの転換期にさしかかった明治三十年代前後である。柳田を農政学へとかり立てたのは、このころ顕在化する「急激な近代化にともなって噴出してきた故郷喪失に対する激しい哀しみと怒り」であったと後藤総一郎氏は説く（『柳田国男論序説』）。少年の日に故郷を離れ、帰るべき故郷の家も持たなかった柳田の境涯は、また、故郷を失わざるをえなかった多くの日本のインテリゲンチアのものであった。

「謹厳なリアリストの素質と負け じ魂」とは母親ゆずりであった。後年、この母親の像と重ねながら、彼は「目に一丁字なくして、事理の明確に言える、人に誤ったことがあると承知せぬ、極めて判断力に富んだ、それでいて表現の力がない」という「常民」像を家永三郎氏との対談で語る。

父は村の知識人ではあったが定まった職のない、いわばインテリプロレタリアートだった。長兄鼎の学費を調達するために家を売り払い、村での生活の根拠を失って一家をあげて母の生地へ移住したり、柳田を辻川の三木家にあずかってもらったりしなければならなかった（中井信彦『歴史学的方法の基準』）。さらに明治二十年、十二歳のときには、長兄が医者を開業していた茨城県北相馬郡の布川（現在の利根町）へ引きとられて行く。柳田の少年・青年期にたたよっているのは「みなくてい孤独な漂泊者のエトランゼ」（橋川文三氏）である。

母の生地に移住していた明治十八年は、きょうの惨状を経験し、それが彼を農政研究へかりたてた動機となったと、柳田はみずから語っているが、その背景には、こうした彼じしんの貧困の体験もあったに違いない。子ども心に何と

かしなければならないと、彼が『救荒選集』を読んだのは十三の年だったという。

故郷辻川を中心とする柳田の郷土体験が、八十数年にわたる彼の思想・学問の形成に、どんなに決定的な影響を及ぼしたか。それは「ほとんど奇跡的な印象を与えるほど」だと橋川氏は指摘する。

座敷と納戸がそれぞれ四畳半、それに三畳ずつの玄関と茶の間――そんな小さな家に親子三組の夫婦が同居せねばならなかったことに起因する長兄の悲劇から、日本家屋の構造への関心が生まれ、やがて民俗学研究へとつながってゆくのである。

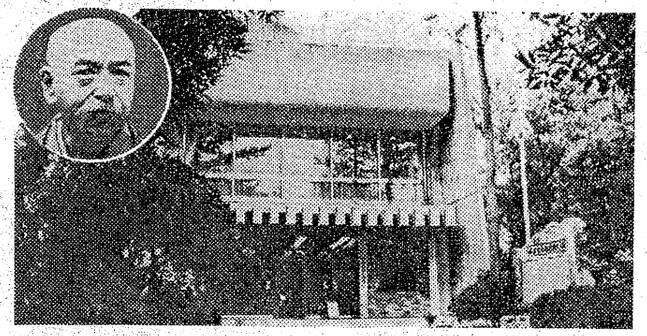
朝日　昭和50年(1975)6月11日

柳田学の「いま」

>3<

生誕百年記念
事業に寄せて

『人間』の復権



昭和40年に開館した南方熊楠（円内）記念館（和歌山県白浜町）
＝平凡社刊「南方熊楠全集」から

南方熊楠が限界を鋭く指摘

はずされた卑俗・猥雑な諸話

宮城の人骨発掘を論評

「二重橋から白骨――けふもまた四個現はる」という見出しの小きい記事が、大正十四年六月二十五日の東京朝日新聞に出ている。

「宮内省では震災で傷つけられた宮城二重橋内の二重やぐら修築のため先般来基礎発掘を始めたところ今月十一、十二両日工事場から数百年を経た人骨四個を掘り出したので大に驚き重々調査中であるが二十三日もさらに同様の人骨四個を掘り出し、その付近には多数の古銭〝永楽通宝〟が現はれるので築城当時何等かの事情で埋めたのではないかと……」。

つづいて三十日には、「人柱とは考えられない」という黒板勝美博士の調査の結果が報じられている。南方熊楠は、このニュースを聞いて直ちに「人柱の話」の筆をとった。東西古今の文献を駆使し、インド、ビルマ、中国、エジプト、ドイツ、イギリス、日本などの例を次々とくり出して、人柱の痕跡（こんせき）は世界中にあり日本にもあったのだから、それが宮城内にあっても不思議なことではないと論じた。

柳田国男の二つの人柱論、「松王御児の物語」「人柱と松浦佐用姫」が発表されたのはそれから二年後である。彼は、南方によって提出された膨大な外国の事例にほとんど注意を向けない。国内に広く流布している人柱伝説の分析から、「人柱になった母子が人神となる理由、人柱を自から提案して犠牲になった心意が存する理由の二点」を問題にし、「人柱の慣習」（住んで粘菌類の研究に精魂をかたむけ、かたわらイギリスの学界誌に民俗学関係の論文を発表していた。柳田は三十六歳。法制局参事官兼宮内書記官の彼は、前年に『遠野物語』を、前々年『後狩詞記』を著して、新しい学問の開拓に向かおうとしていた。

柳田がたずね、多くの例証をあげて南方が答える。尊敬と親愛の情に彩られた両者の関係は、大正二年末の柳田の南方訪問を経て、「竜虎相打つごとく敵意を燃やしあう」大正五年末まで続く。それは、谷川健一氏によれば、南方の「圧倒的な影響に、柳田がどう対抗して自己の民俗学を確立して行くかの劇的な過程」である（「『縛られた巨人』のまなざし」）。

二人の関係が微妙に変化して行く最遅の南方の論は、柳田による卑俗・猥雑なものがはずされている点をつく。南方は「柳田民俗学の出発点にあたってはやくおその限界をするどく指摘しだ」（谷川氏）のだった。

指導と助言求める書簡

柳田が「平日深く欽仰の情を懐きをり候」と、辞を低くして南方の指導と助力を求める書簡を送ったのは明治四十四年三月。時に南方、四十四歳。長い海外遊学から無一文で帰国し、和歌山県田辺に住んで粘菌類の研究に精魂をかたむけ、かたわらイギリスの学界誌に民俗学関係の論文を発表していた。柳田は三十六歳。法制局参事官兼宮内書記官の彼は、前年に『遠野物語』を、前々年『後狩詞記』を著して、新しい学問の開拓に向かおうとしていた。

柳田がたずね、多くの例証をあげて南方が答える。尊敬と親愛の情に彩られた両者の関係は、大正二年末の柳田の南方訪問を経て、「竜虎相打つごとく敵意を燃やしあう」大正五年末まで続く。それは、谷川健一氏によれば、南方の「圧倒的な影響に、柳田がどう対抗して自己の民俗学を確立して行くかの劇的な過程」である（「『縛られた巨人』のまなざし」）。

二人の関係が微妙に変化して行く最遅の南方の論は、柳田による「笑い」の研究は「下品な笑い」が抜けている点をつき、古野氏は柳田が「民衆生活における卑俗・猥雑なものがはずされている点をつく」。南方は「柳田民俗学の出発点にあたってはやくおその限界をするどく指摘しだ」（谷川氏）のだった。

失ったものを問い直す

おそらく、柳田の選択は正しかっただろう。性や卑俗で猥雑（わいざつ）なものを、慎重に、当面の目標からはずすことによって、日本におけるフォークロアの学問は市民権を獲得した。柳田にはオルガナイザーとしての任務があり責任があった。そして今、この学問がその発展の過程で失ってきたものの意味を問いなおす作業がさまざまに試みられている。益田氏は「柳田の偉大性を認めつつ、かれが生涯をかけて問題をしぼりあげ、鋭く解明していった方向だけを継承しない。そこに、わたしたちにとっての南方のひとつの必要性がある」（前掲書）という。

満は、柳田の説明によっても解消されなかった。また別の手紙で南方はこういう。「この『郷土研究』は貴族院書記官長柳田国男氏……が編纂（へんさん）して、すいぶんとく編み居るが、氏は在官者なる故、やや猥雑のきらいある諸話はことごとく載せず、これドイツなどとかわり、わが邦上下感倫外飾をたっとぶの弊に候。……かようの慎みはなはだ学問の増進に害ありと存じ候」と。

南方のこうした批判は、たとえば約五十年後の、林達夫氏や古野清人氏の柳田学批判と、みごとに照応する。林氏は、柳田による「笑い」の研究は「下品な笑い」が抜けている点をつき、古野氏は柳田が「民衆生活における卑俗・猥雑なものがはずされている点」に目をそらせている点をつく。南方は

「郷土研究」を創刊したころからだと谷川氏はいう。「『郷土研究』の記者に与うる書」（大正三年）で、南方は同誌の編集内容を批判し、「夜這（よばい）」の問題に言及して言う。「この夜這の規条、不成文法ときも、実は大いに研究を要することにて……それを忽諸（なおざり）に付し、また例の卑猥卑猥と看過して、さて媒妁がどうするの下媒人に何人を頼むの、進物には何を使うのと、事の末にして順序の最後にあることをのみ書き留むるは迂（う）もはなはだし」と。

柳田の行き方に対する南方の不満は、柳田の説明によっても解消されなかった。また別の手紙で南方はこういう。「この『郷土研究』は貴族院書記官長柳田国男氏……が編纂（へんさん）して、すいぶんとく編み居るが、氏は在官者なる故、やや猥雑のきらいある諸話はことごとく載せず、これドイツなどとかわり、わが邦上下感倫外飾をたっとぶの弊に候。……かようの慎みはなはだ学問の増進に害ありと存じ候」と。

南方のこうした批判は、たとえば約五十年後の、林達夫氏や古野清人氏の柳田学批判と、みごとに照応する。林氏は、柳田による「笑い」の研究は「下品な笑い」が抜けている点をつき、古野氏は柳田が「民衆生活における卑俗・猥雑なものがはずされている点」に目をそらせている点をつく。南方は

「郷土研究」を創刊したころからだと谷川氏はいう。「『郷土研究』の記者に与うる書」（大正三年）で、南方は同誌の編集内容を批判し、「夜這（よばい）」の問題に言及して言う。「この夜這の規条、不成文法ときも、実は大いに研究を要することにて……それを忽諸（なおざり）に付し、また例の卑猥卑猥と看過して、さて媒妁がどうするの下媒人に何人を頼むの、進物には何を使うのと、事の末にして順序の最後にあることをのみ書き留むるは迂（う）もはなはだし」と。

柳田の行き方に対する南方の不満は、柳田の説明によっても解消されなかった。また別の手紙で南方はこういう。「この『郷土研究』は貴族院書記官長柳田国男氏……が編纂（へんさん）して、すいぶんとく編み居るが、氏は在官者なる故、やや猥雑のきらいある諸話はことごとく載せず、これドイツなどとかわり、わが邦上下感倫外飾をたっとぶの弊に候。……かようの慎みはなはだ学問の増進に害ありと存じ候」と。

南方のこうした批判は、たとえば約五十年後の、林達夫氏や古野清人氏の柳田学批判と、みごとに照応する。林氏は、柳田による「笑い」の研究は「下品な笑い」が抜けている点をつき、古野氏は柳田が「民衆生活における卑俗・猥雑なものがはずされている点」に目をそらせている点をつく。南方は

朝日新聞　昭和五四年（一九七九）六月一三日

柳田学の「こころ」

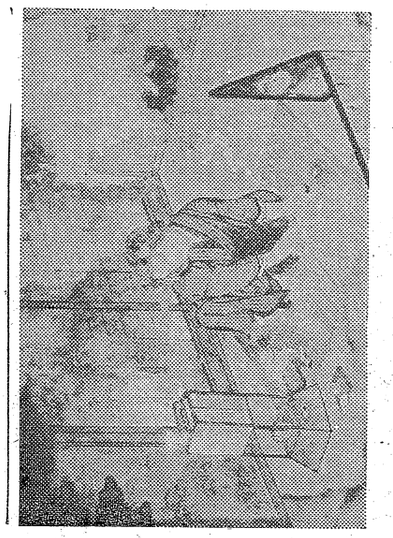
生誕百年記念事業に寄せて

→4

国学者・詩人・科学者

体系化の試みに成らず

統一妨げた内面のかっとう



幼い日の柳田に深刻な衝撃を与えたといわれる鈴鹿一次城藩士岩崎敬利祖母、優婆夷（うばい）

……

今年の日の新聞は印象

茨城県北相馬郡利根町の優婆夷（うばい）

明治三十年代の初め、布川（現在の利根町）の草屋のなかに寄宿をしていた少年柳田国男が、ある深刻な衝撃を与えたといわれる鈴鹿一次城藩士岩崎敬利祖母、優婆夷（うばい）の女が鈴鹿の一族郎党の惨殺を目撃したことを、その図絵（ずえ）を描いて少年柳田に語ったからである。

「その女は、ある日、ヨコ九十センチ、タテ十五センチの絵図を、画面いっぱいに、数人の男が、刀を振りかざして、人を切り、血を流している図を、指さしながら、ものすごい形相で、語りつづけた。